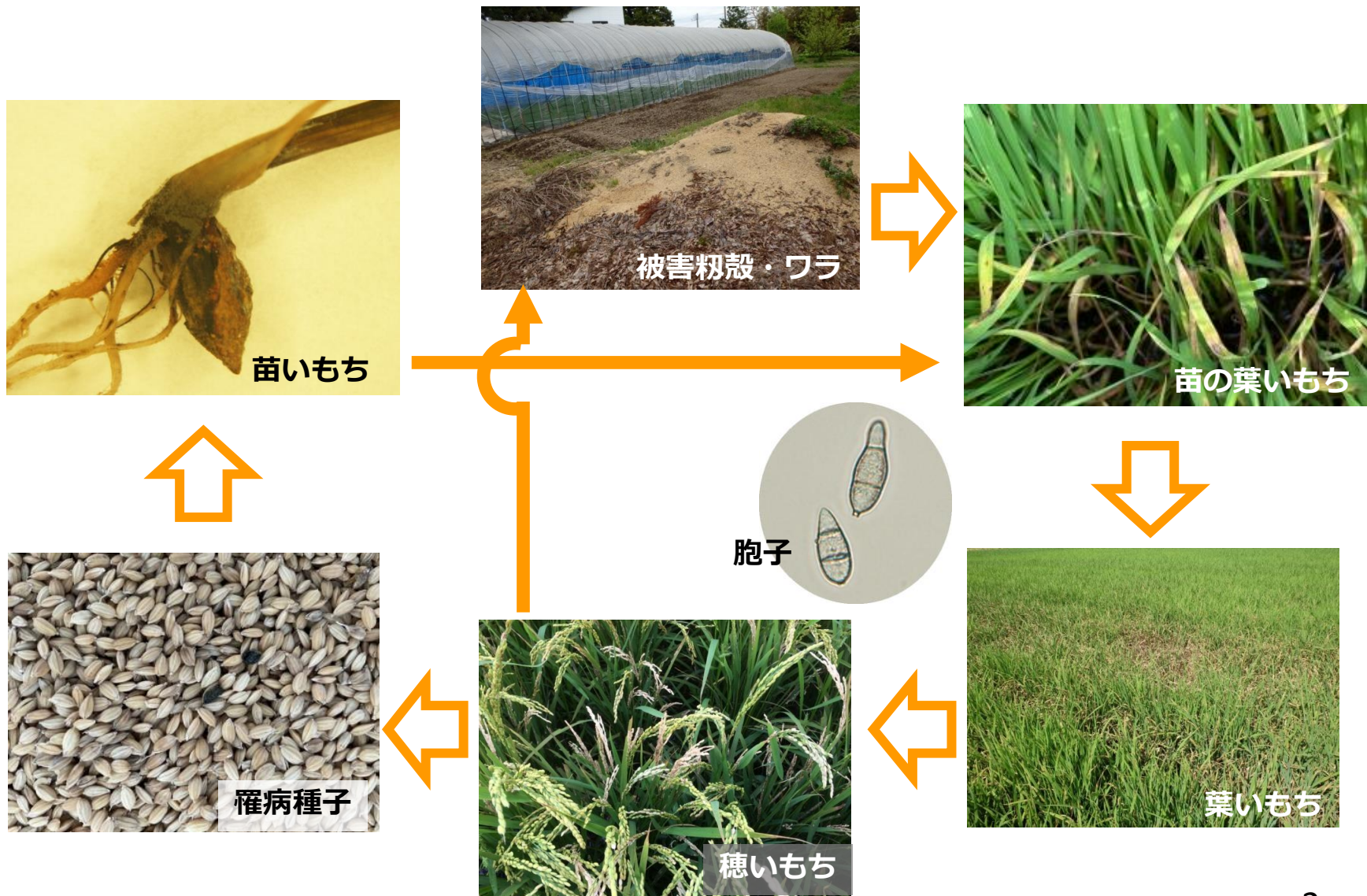


秋田県におけるイネいもち病の 省力防除技術の開発

秋田県農業試験場
藤井直哉



いもち病の伝染環

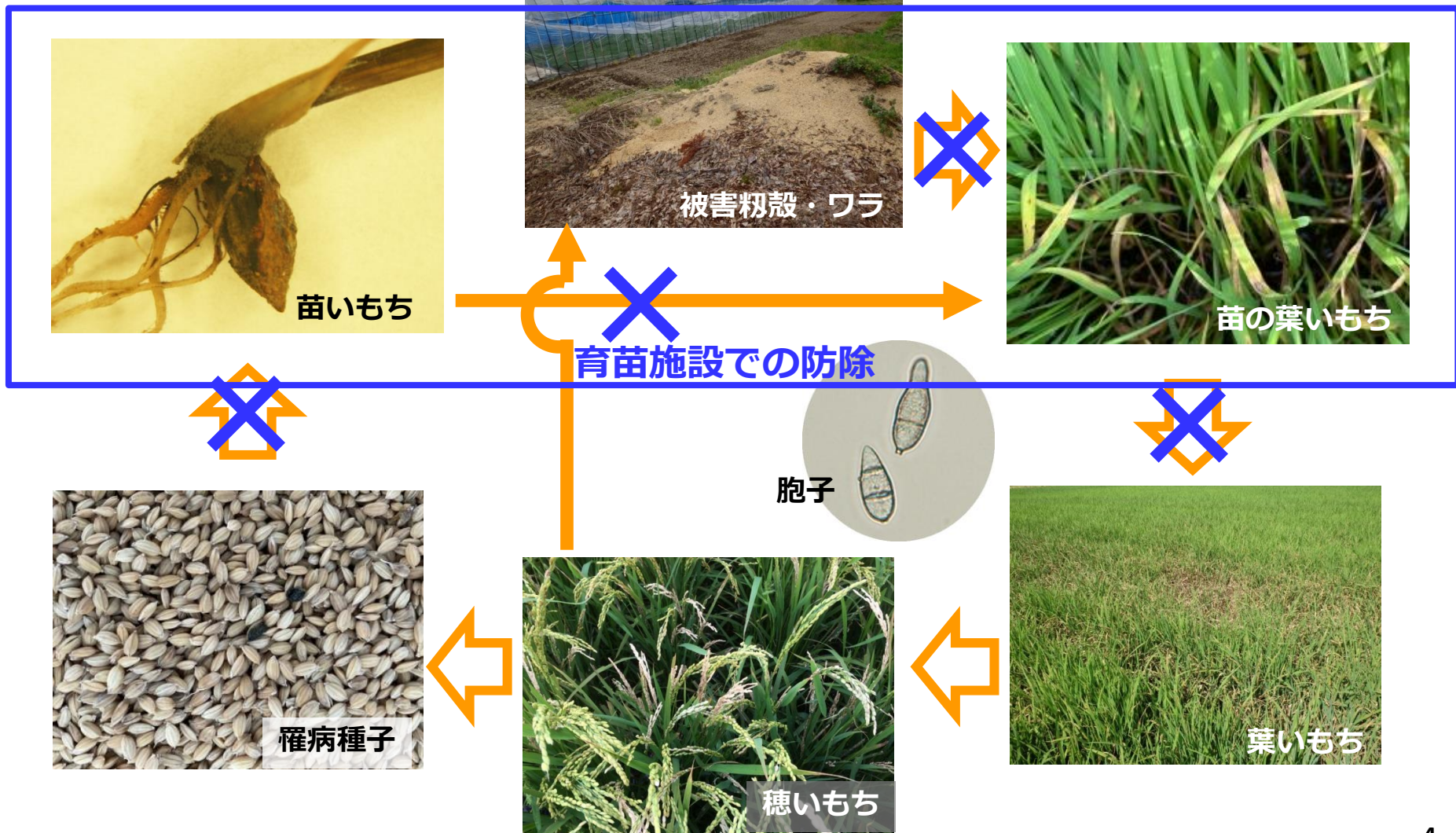


いもち病防除のタイミング



大面積を対象とした防除

いもち病防除のタイミング



秋田県のいもち病防除の考え方

従来のいもち病防除

衛生管理

+

種子消毒

+

葉いもち防除

+

穂いもち防除

現在の秋田県のいもち病防除

衛生管理の徹底

+

種子消毒

+

育苗期いもち防除

+

葉いもち防除

防除コスト

高い

防除作業の
労力

多い

防除効果

不安定



本田期のラジヘリ防除

安い

少ない

安定



育苗期の灌注処理

省力・低コスト防除防除技術の確立（主な成果）

1. 省力的で防除効果が高く、コストが安い育苗期防除薬剤の検索

- 育苗期と本田の葉いもちを同時に防除できる箱粒剤を農薬メーカーと共同開発（2010年）
- 低コスト・高い効果を示す育苗期いもち病防除薬剤の検索し、農薬登録へ（2013年）

2. 様々な生産者ニーズに対応できる葉いもち防除手段の確立

- 育苗箱数が少なくなる疎植栽培では葉いもちに対する育苗箱施用剤の防除効果が低下する場合があることを明らかにした（2014年）
- 直播栽培で葉いもち防除効果の高い薬剤を減量施用し、効果を確認し現場へ普及（2015年）
- 移植栽培の栽植密度が異なる条件下でも安定して防除効果が発揮できる粒剤の側条施用技術を農機具メーカーと共同開発し、現場へ普及（2019年）



- 減農薬防除体系を現地で広域的に実証し、現在の「あきたecoらいす」における減農薬栽培の柱の一つとなっている

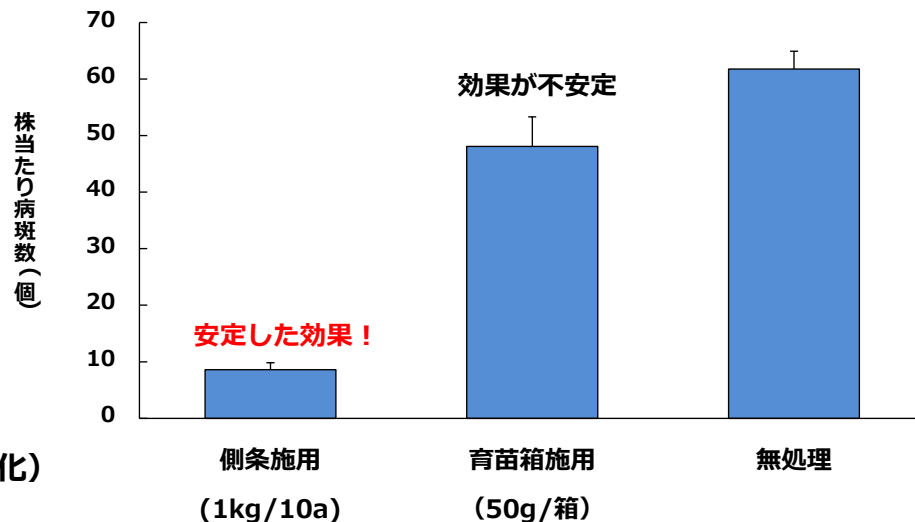
育苗箱施用剤の側条施用による葉いもち防除



農機具メーカーと共同開発した側条施薬機（市販化）



苗の側方4.5cm,深さ5cmに施薬
(実際は溝が閉じた状態)



高密度播種苗（乾粃300g/箱）と疎植栽培（37株/坪）を組み合わせた条件における各施用法の葉いもち防除効果（2020年）

供試薬剤：クロチアニジン・イソチアニル・フラメトピル粒剤
10a当たりの薬剤使用量(実測)：0.9kg(側条)、0.2kg(箱)

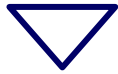
メリット

- ・ 栽植密度にかかわらず、安定した施薬量(1kg/10a)で処理でき、薬剤無補給で1ha田植えできるため作業効率UP
- ・ 苗に薬剤を処理しないため、無駄な余り苗が生じない

いもち病の省力・農薬削減・低コスト防除への取り組み

「あきたecoらいす」とは…
使用農薬を慣行の50%以上削減した環境に優しい米づくりの総称

↑
県農業試験場では開発・発展させた防除体系を現地実証し、提示
(あきたecoらいすプロジェクト2008～2012年)



▽
直播栽培や飼料用米等の米生産の多様化に対応した病害虫防除技術の確立
(2016～2020年)



▽
業務用米、多収性品種等に対応した病害虫防除の確立
(2021～2025年)



発行：JA全農あきた 編集：農業試験場
2015年